

翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (十)

清田啓子

凡例

- 一、「駒澤短期大学研究紀要」第十七号に、「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (九)」を載せ、数年間休止していたが、今回、その続きとして、享和二年刊『筆耕作／稿裁着種蒔二世相』・『野夫鶯歌曲詠言』・『六冊懸徳用草紙』をとりあげた。
- 一、底本には、東京都立中央図書館加賀文庫本を用い、大東急記念文庫本によって校合した。
- 一、黄表紙の性格上、絵組が重要であるので、複製のかたちで各丁見開きの面を一枚の写真とし、丁付により「一ウー二オ」のように示した。なお、この写真は、中央図書館蔵本を手控え用として撮影させていただいたもので、同館の許可を得て掲載した。
- 一、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠して、写真と対応させた。丁移りは「で示したが、書入れについては丁付にこだわらなかった。
- 一、上記の一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻のみ、「五ウ」「六オ」というふうに分離した。
- 一、翻刻については次の方針によった。
 - 1 原文はできる限りそのままとする。かなづかい、あて字、おどり字、濁点等は改めなかった。
 - 2 漢字・仮名とも、異体・略体字は、現在通用の字に改めた。

- 3 読みやすくするため、句読点は補った。
 - 4 スペースの関係上、漢字におきかえた所もある。その場合、もとの仮名をルビに移した。
 - 5 原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。ただし序文等仮名つきの部分は、一々（ ）をつけず、その旨をその箇所ごとに断った。
 - 6 書入れは、本文のあとへ一段下げて付け足し、大体、右から左へ、上方から下方へという順で並べた。
 - 7 脱字と思われるものはへゝ内に補い、衍字と思われるものは（ ）に入れた。
 - 8 判読しにくい箇所も数多くあったが、読みとれた形に一応おきかえて、大方の御示教を仰ぎ待つこととした。
- 都立中央図書館、大東急記念文庫の御好意に感謝いたします。

付記

素人演ずる「道成寺」の乱拍子の如く、間のびした連載になってしまったが、ようやく鏡入りにまではこぎつけたように思う。急の段を間違ひなく仕了せるよう心がけるつもりである。

今回の三種には殊に馬琴の歎息が顕著に表われていると思う。『野夫鶯』の「一体地口の趣向が狭く……魚尽し鳥尽しとそう／＼こじつけられるものでもなく……第一作者が大きに手こずり」（十四ウ）は、思い付いた趣向そのものが限界あるものであったという作者の悲鳴と聞え、『三世相』十丁裏では、畑右衛門権兵衛両人の名を取違えるほどの乱れが見える。更に『六冊懸』に於ては、完全に黄表紙の約束ごとをふみにじった。即ち「たゞ伏沈み泣く／＼よりほかに言葉なし」（十オ／十ウ）「その心底／＼をも聞給へと」（十一オ／十一ウ）「用意の乗物へ／助け乗せ」（十二オ／十二ウ）その他のように一枚の絵組に対応する文章が完結していないのである。

筆耕作 ふでのごうさく
 稿裁着 したまのうへつけ
 種蒔二世相 たねまきさんぜさう

(一オ)

種蒔三世相自叙 たねまきさんぜさうじじよ

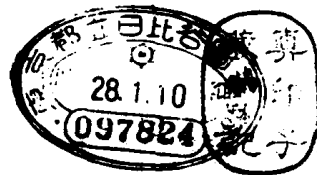
(振り仮名・句点は原文のまま)

たうくたたりく。たたりら。あがりたたりたう。ちりやた
 たりや子供たらしの。戯作にとんと板元の。文はちづかにおよ
 へども。案じのないは。さりとはく。しんきなことじやへ。
 筆のてまへも恥しく。今年はあて、評判に。なるかならぬか。
 ならぬか。なるか。なるは瀧の水日はたつとも。絶す問屋の催
 促に。否でも応でも。ぜひに一筆御書候へ。あら開はしや。さ
 あらば作をまいらせん。それは種蒔三番叟。是は種蒔二世相。
 まはらぬてに葉の引言は。三絃ならぬなみ銭の。一本二巻三ヶ
 日。寝言礼者に起されて。めこすり膾節肴。はるは草紙の試筆
 も。祝ふてやがてとし玉の。やたら扇をおさめけり。

享和壬戌春帝端月

著作堂主人馬琴述 印

(一オ)



種蒔三世相自叙 印
 如野文事
 通油町 鶴喜坂
 享和壬戌春帝端月
 著作堂主人馬琴述 印

久しいものだが作者馬琴ことも草双紙の種に困り、凝ては思案にあたらざるの弁天から、ひとりうそく王子辺をぶらつきける。稲荷の社の方より八十ばかりの老翁いねを背負ひ漂々然と来り給ふは、正しく当社稲荷の神体、ありがたしと忽ち膝行頓首して、なむ稲荷大明神何とぞ草双紙の種を授け給へと一心不乱に念じければ、この爺様胆を潰し、これくわしはそんな者ではござらぬ。担いだ物を稲穂と見たはそつちの誤り、「わしは駒込から出る竹箒売でござると言われてぐんにやりせしが、忽ち心に一つの種を見つけたり。その種を何だといへば翁なり。翁は三番叟に縁があり。三番叟は種蒔が一番はやる由、先外題を種蒔三世相とこじつけて、蒔ぬ種は生ぬといふ喩を二冊の草子に作る。

へこいつは一ばんあやまつた稲荷様だはへ。

へなるほど作の種もねへもんだ。さうしせんりこれたねのと、

まるところなり。ア種が敵のよの中じやなア。

へ去年以来俳諧節用抄に取か、つておつて、戯作の種を失ひま



した。この節用抄は紙数上百丁余のものにて、我ら生涯の大業でござる。この節やうくでき上りました。」

「草子の三番叟に翁がでたから種蒔とは、なるほどこじつけたものだ。草双紙の種には何がなることや、素人のとんと知らぬこととでござります。」

〔二ウ—三オ〕

諺に「いふ如く世の中のこと全て蒔ぬ種は生ず。生ても手入が悪ければ実らず。ひけ過の硯蓋じやアねへが、ちよつとつまんでいへば武士の飯の種はお太刀にて、商人の飯の種は算盤なり。茶碗をこはして小言の種をまく下女もあれば酒を飲で遊びの種をまく息子もあり。凧がからみあひて子供喧嘩の種となり、それから喧嘩の枝がさいて親々がいがみあふ。恋は女子の癩の種、後生」の種の念仏は申しても、欲の皮のでみつをくらつて菩薩の実入は悪しかるべし。しかればまめ蔵のしな玉の如く万事種のないものはなけれども、めいくの手入が悪い故、つるにはなんだらぼうしの柿の種となる。よき種をまけば豊年のさ

〔二ウ—三オ〕

壁の大小の屋わけて、筑機関の糸々。田王と魂てまましく、観官銭を時て、多々少々。河の舟を咄して、笑ひ種とわんふ富り。元日や喜怒哀楽八種あり。

○喜怒哀楽種物八品

なま	ふ	あ	め	あ	あ
なま	ふ	あ	め	あ	あ
なま	ふ	あ	め	あ	あ
なま	ふ	あ	め	あ	あ

いわいあり、悪き種をまけば火損水損の憂ひきたる。されば歌

に

植てみよ花の育たぬ里もなしこ、ろからこそ身はいやしけれ

(二こより左、振り仮名句点原文のまま)

壁に大小の差ありて。箒に機関の糸なし。玉田玉を殖て。玉

ますく多く。観官銭を蒔て。銭いよく少し。憐む者叫化

子。日に懸河の弁を研して。笑ひの種をおろすに富り。

元日や喜怒哀楽の種おろし 馬琴

○喜怒哀楽種物八品 このたねまきやうは、どうめいたこう

めいた、となりのばあさんちやをまいたることくにまくなり。

(三ウー四オ)

むかしくその昔、いざなぎいざなみの二神天の浮橋のひの

口にて秋津州六十よ州の新田を開発し給ひ、鶴鶴の尻尾ひよこ

くとひよこつくを御覧あり、初めて子たねをおろし給ひしよ

りして、夫婦朋輩士農工商の枝葉にしげりて万民豊年を樂しむ

こと、かけまくもかしこきこの親分のお蔭也。然れば我ひと

(三ウー四オ)



との種は一つなれども心の手入が悪ければ役に立ずのしいなどなる故、よの中に儒佛神といふ三教のか、しを立て、人欲の鳥を追払ひ、人面獸心の心の猿をおどし給ふ。昔の人のしておいたことに五分もすいたことはなし。此どうづれの口からいふは勿体ねへが、みんなありがたいとまふしやれ。

など、こふ終をちやかしておかねへと余り理屈くさくなる也。草双子の漉返し、臭いは仕方ねへが、理屈くさいが一番悪し。しかし始はこんなに固く見てもだんくやわらかになりやす。とんと冷飯を鍋湯漬けにするような趣向なり。

○六十余州人間種蒔

○凡夫案山子

〔四ウ―五オ〕

貫之が古今集の序に、それ和尚はひとの心を種として万のこのはとぞなれりけるとあれば、人の心の種ほどさだまらぬものはなし。瓜茄の種をまけば必ず瓜茄子がはへ、里芋南瓜の種をまけばいつでも里芋南瓜がはへる。もしまちがったところが

〔四ウ―五オ〕



唐瓜とうかになるくらいのことなり。人の心の種こころのたねはこれにことかはりて三悪道あくどうの畑はたけへまけばとんな律義りちぎな心の種こころのたねでも、鎌かまで切るやうなおそろしい心ができる。たとへば幼き時おきなときてならひがくもんときてならひがくもんなく、その道みちの業わざを耕たがやせば忠孝ちゆうこう積善しやくぜんの上田(でん)となり、無芸大食むげいしよくの未進みしんにはたたる、恥はぢをか、ず。書物筆墨算盤しよもつふですみそろばんは心のこやしなり。お師匠様しせうさまは鋤鋤鎌すきくわかまの農具のうぐに似たり。されば心のこやしをせず、鋤鋤すきくわの師匠しせうなければ心の種こころのたねがわがま、に生はへて、縁えんの下したへできた小豆あづきのごとく一生しやうそのみに花はなの咲さくことはなし。

○学問畑打(がくもんのはたうち)

へいふことなかれ今日こんにちさりて明日めうありと。言ふことなかれ今年こんねん学ばずして明年めうねんありと。日月往ぬ年じつげつゆきとしわれと友ともならず、わがとうの小子(こせう)つとめよや。

へお茶ちやをひく女郎じゆしやはみたが儒者じゆしやのひく駒こまはこれが初はじめてた。ヲヤじゆしやアまごらしい。

へ大おほくしきよくせうほていしのいはく、大おほくは当寺(たうじ)のほだにして兎角とかくとこにいるのもんなり、コウくぢかすべらね

へと先生こせうも小言こごの種たねがまかれねへ。

へしせうばかにしたとはこのことだろふ。

へひまゆく駒こまは豆まめをくはねど一ひとときくに太鼓たいこを打ち、夜よるは拍子木ひやうしぎを打つなり。油断ゆだんすべからず。

(五ウ)

廿四(じゅうし) 孝(こウ)の郭(くわく)臣(きん)といふ人ひと孝行(こウ)の種(たね)をまけば忽(たちま)ち黄金(こがね)の花(はな)がさく。親(おや)のためにこの子を埋(うめ)んとするは孝行(こウ)なれど、子(こ)に慈悲(じひ)がないと思(おも)ふ人もあるべきが、わが子を埋殺(うめころ)してもと思(おも)ふ孝行(こウ)の心(こころ)の種(たね)は天道(てんとう)様がからし給(たま)はず、いづな遣(つか)ひの瓜(うり)

のごとく、まくよりはやく金の蔓にとりつく。しかれば孝心の種は人参のたなより有難く、忠義の種は胡瓜の種より格別なり。

○善種時(ぜんのたねまき)

孝行な人の庭からいびつな物を掘出た。ヤレく沢庵の小口切か、た、しやおかわのせりだしか、ヤレくおきやアかれ。土の中から金がで、は、大黒煎餅の看板をみるやうでござんす。

サアくとんだものを掘出た。おらア又小ぞうが胞を入たごとう土器かと思つた。コウほりだしがきいちやアいらい道具屋をはじめることつた。

金一釜とは金の数のことだに、黄金の釜と読違へて、毎度おれには黄金の釜をほらせておく、陰間をかひにゆきやアしめいし。

〔六オ〕

五十両の金に目がくれて悪心の種をまく定九郎は追剥の畑へおちて、おのが田へ水を引ても手負猪に荒されて、黄金のみ

〔五ウ〕〔六オ〕



いりもせぬうちに二つ玉の火花が咲き、烟硝の火損をくらつて真赤になつて枯れてしまふ。まことに悪の種が鳴、そのなる果はあはれなり、なんまいた。

○右に述べたる趣はちと理屈くさけれど、善悪邪生みなわがまきし種なることを明す前置の言草なり。此世で悪をなせば来世にて報ふよし、三世相にみへたれど、この世で悪をたくめばやつはり此世で報ふなり。こわやのく。

○悪種蒔(あくのたねまき)

へ財布をか、しに見せやうと思つて、ひどい工面で書た所がやつはり布目のある瓦燈へ糸を付たと外アみへねへ。

へ亀蔵が七役は大入の種にして太夫元の豊年となる、餅は餅屋、立者の種は必ず立者になる。

桃の種が猿になり瓜の種が菊の花になるも又めづらしからず。

へこれは婿が出世の種、中食の握飯と柿の種ならとりかへもしませうか、それでは猿と蟹の話を見るようだ。

(六ウー七オ)

七去の罪の内にも子なきは去るとありて、女房は子だねをおろす田地也。しかれば畑主の手入次第にてよき子だねもあしき子だねもめぐむへし。こゝにこうさくや畑右衛門といふものあり。又その隣にたねまきや権兵衛といふものありて、子供の時から一ツ井戸の水のみあひ、手習の先かけを争ひたる中なりしが、畑右衛門は律儀一辺の男にて、親の授た女房をまもり、家業に精出し、権兵衛は我が利口に迷ひ、主人の娘をそゝのかし、奉行先から二人駆落して故郷へ引籠り、広い世界をせまく暮すうち、畑右衛門権兵衛の女房隣合せにて同じ月より身がおもくなり、玉のやうなる男子をまうけけり。畑右衛門が女房は色黒く不器量の下田なれども心だてやさしく、権兵衛が女房はお蚕にくるまつて育つ

ただけ美しき上田なれども志すぐならず、殊にもとがち、くり
 あひのことなれば、亭主の手入が行届かず。しかれば兩人の子
 だね此末いかなる花か咲ん、まづ下回の分解をきけ。

○妹夫種蒔上下

へめでたく我ら納めませう、せんべい樂には民をなで、まん
 じうらくがん命をのぶ、相に相生の松風さつまいもの声ぞた
 のしむ。

これでは駄菓子屋の店下しをみるやうだ。

なんでも晩にはしつかり子だねをまくことだ、しかし風吹烏
 にほぢくられてはおそれる。

へ熊手の先へ財布をひっかけては酉の市の帰りだといふだら
 う。

へはつかねずみに四十から つがひあわせて二は残る とは
 梅川の文句にある。丁度二人が今の身上、どうも末がつまら
 ねへもんだ。

〔七ウー八オ〕

〔六ウー七オ〕



麻あきの中なかの蓬よもぎはおのづから直なほく、かさの中なかのぼたもちはおのづから丸まるし。氏うぢより育そだち、たゞ幼おきなき時ときの躰しつげがらにて、律りちぎ義ぎにも道どう楽らくにもなること苗なはしろ代しろの内うちの稲いねのごとし。されは畑はた右衛門せがれが伴せがれ田たの吉はやは早はや四よつ五ごつの頃ころにおしいほしいの枝えだ葉は出いるにしたがひ、毎まい日め目め先さきに出いるどら焼やまき薩さつ摩ま芋いもおこし饅まんぢう頭あたま或たごは舩ふね独ひと楽らく全ぜんての遊あそび草ぐさが生は繁しげり、黒くろ砂さ糖とうの肥こやしが過すぎて五かん疳がんの虫むしがつき、こまの芯しんぼう棒ぼうを投なげ付つけて葉はを二まい枚まい打うち折をられ、ついに跡あとあと取とり皆かい無むのやせ」ばたけとならん「と」せしかば畑はた右衛門せがれ大だいきにおどろき、先まつ折せつ檻かんの鎌かまをもつてどら焼やまき薩さつ摩ま芋いものねだり草ぐさを刈かり取とりて、太あん一いつ庵あんの一いつ粒りゅう丸わん、京きやう橋はしの読とく書しよ丸わんそそ他ほか奇き応おう丸わんひひに丸わんの肥こやしををかけ、毎まい日じきかいてんすうをいぶして五かん疳がんの虫むしを殺ころしければ、田たの吉きち忽たちち生いきくとしてよくでき秋あきのむすことなり、双ふた親おや豊ほう年ねんの末すえをたのしみけり。
 へ河か東とう節ぶしの灸きうすへの文もん句くに、すへてやるのは恩おんならず、すへさせるのを恩おんにして、とはよくいふものだ。
 へ二三日かまはぬうち、鎌かまでかつきるやうなねだりぐさが生はた、油ゆ断だんのならぬ。

○折せつ檻かんの苗なはしろ代しろ

〔七ウー八オ〕



○養生の田草取

○五疳の虫送

へ五疳の虫がなくなつたら赤団子でもこしらへて祝ふべい。
たゞしつねり餅にしやうか。

〔八ウー九オ〕

へあの吉原雀は小菊の枝へ止りたがるから、大かた床花の返
しだろう、ほういく。アレいけ図々しい、まだ飛ていかね
へ、とお袋大きに気をもむやつさ。

へぐわらくくくくくばつちくく二天作の五、大学朱熹章
句、さつきうの一、し、しゆつちうの十六、サアく算盤と
素読がこぐらかつて、ちんふんかんでうが合ぬく。

かくまでできよき田之吉なれど、ほれたほの字のでる頃は吉原
雀がつきたかり、或はつま恋ふ鹿にあらされと八朔あれの物日
を食つてつい恋風に吹折れんことを畑右衛門とをく慮り、ま
づ手習学問算盤の鳴子をひつはり、風吹烏の友をよせ付す、吉
原雀の道を断ければ、田の吉てらされた火損もなく、長じけ



〔八ウー九オ〕

のふられるといふ遊も知ねば、さても出来のよい田の吉かなと
世間の人もうらやみけり。

へわるい友がらすにつゝ、きまはされぬは親父のお蔭だ、なん
でも辛抱をして孝行を尽しましやう。

○律義になる子

へか、あどんや、今度は鳴子を引ぬ代りに年増のか、しだと
いひ申す。

いろどりの曰

へあんな堅い親父がついてゐて鳴子やら小言やら一日くわら
くくどとなり散す、所詮このむすこは喰ねへ、早くにげ
ろく。

〔九ウー十オ〕

さて又権兵衛が伴なゑ太郎も四つ五つの頃よりかのどら焼薩
摩芋のねだり草、石投とんぼがへりの遊び草がはへ茂りけれど
も、畑主の権兵衛夫婦恩愛にほたされ、ねだり草も刈取す、と
かく銭金のこやしのみかけて我儘一はいに育てければ、苗太郎

〔九ウー十オ〕



十七八の頃よりとんだ手のある虫がついて、あたり肥を費しけれども、権兵衛さらにこれを知ず、よきでき秋と思ひけり。されば古人も、ひとその苗の大きいなるをしることなく、その子の悪きをしることなし、と言ひけるはこのことなるべし。

○恩愛の肥

へこひをとらうより色をとれだ、倅めが気が大ぶん大きくなりおつた。

わかい時は二ど、はねい、ちつとぐらゐ美しい虫がついても切れる時にやアきれやすのさ。

へなゑ太郎が傍にはぺんく草に鼓草がおひしげり、かの銭金のこやしを吸取る。

〔十ウ〕

されば苗太郎が畑、藤豆ぬかごの蔓のごとく延たいま、にのびるほどに、近所の年増へ這かけてぐるぐると絡みつき、大きに顔の皮をむかれ、した、「か」恥をかくといへども、畑右衛門はみのかきもしてやらず、ますく銭金のこやしのみかけたりしかば、苗太郎いよく氣ばかり大きくなり、ついにぐどんの大木となる。

○放蕩虚花

へなんぼすな村の唐瓜野郎でもからんだことは言ねへ、ちつと食てみな、請合てあげるのだ。

へ丸売の水瓜じゃアねへが、この胸が割て見せてへわへ、そこらに出刃包丁はねへか、江戸つ子が喧嘩をしやアしめし。

へふんどしのさがりから南瓜が生ては、人がきん玉をおとしたと思はねはい、が。

へヲヤなれくしい、いゝきな人だ、余り悪くしやれなさん
な。

〔十一オ〕

それにひきかへ畑右衛門は田之吉が手入に油断なく、朝晩に
教訓のこやしをかけ、交りの水をうちければ、田之吉が身内よ
り金銀の穂に穂が咲て、元手の蔓にとりつきしゆゑ、畑右衛門
早速ころばぬ先の杖にからみつかせ、商売の店をもたせ、黄金
の花をさかせけり。

へ総身が冷て身内が金とは伝左衛門が口合。人は心の種のもち
やうにて実る黄金の花もさくなり。

へコウかたくなり固つちや二百十日の恋風がふいても氣遣のき
のじもねへ。

○金銀の実入

〔十一ウー十二オ〕

苗太郎は奢が越て気が大きくなり、やたらむしやうに金銀の
むだ花を撒散し、花の下はやぶからしの蔓のごとく手の届くた

〔十ウ〕〔十一オ〕



け使ひ果して、終に家屋敷を引倒す。ひの木山の火は、檜から
出、ひの木を枯す。たゞ恐るべきは子だねの手入なり。

へ主やア滅多無生にからみつかつしやる。いつそひつつこい
ぞよウ。

へ女郎買いに根が張てきては家屋敷の一ヶ所や二かしよは引
倒すは造作アねへ。

へ草双紙の絵組に胸から夢のでたところは度々書たれど、胸
から蔓のどるといふことは、ばかくしいやうなれど、やは
り灰吹から大蛇の出る理屈、すてないことでもなし。

○身代の野夫枯

へたねにうらみはかずぐござる。

へつるは千両の屋敷をたほし、かみは万八の齡をのぶはどう
でこせず。

〔十二ウ—十三オ〕

へ家の内は火が降たから火損かと思つたに、借金しやつきんの測かちがきれ
て水損すいそんになつたか、うまらねへ。

〔十一ウ—十二オ〕



かくて苗太郎いよく遊に枝がさき、家屋敷をからみ倒せど、畑親の欲目からは、若い時は誰もありうち、みやれ、あれでも始終金をかけて育てたほどのことはあると油断してゐる。そのうちに二百十日の居続けから身代ますく大荒となり、つるに借金しやつきんの淵ぶちがきれて掛乞かけこひの出水でみづに流れ、むざんなるかな、これまで丹精たんせいして育てたる苗太郎も身代皆無しんたいかいむ たねなしの種無たねなしとなりて、行方ゆきがたしらずなりけるぞア、きのどくらしい。

○借金の水損しやつきん すいそん

へゆふべのたかりの一両二分も種たねなしになつたか、かなしや
へ十六両むぎやりに刈かりられて、小つぶ一粒いちりゅうも返かへさねへじやア
子盲こめくらの立場たちばがござらぬ。いつひやう勘定かんでうにあはぬく。

〔十三ウ—十四オ〕

畑右衛門夫婦が丹精時たんせいとき至りて、田之吉たのきちついに廿五あきの秋あきとなりければ、まづ親おやの慈悲じひの唐竿からまほをもつて姪酒いんしゆのふたいろの粳糠もみぬかをはたき分け、さて聖教せいきやうの箕みに入れて五塵六欲ごじんろくよくのちり芥あくたをふるひ

〔十二ウ—十三オ〕



落し、五常の臼をもつて一身のまことをしらせ、らく／＼たる
 いつしやう升をもつて身の分限を計りわけ、常に喜びを重ね俵
 へ詰ければ、その田之吉のほに穂」栄へて、孫ひこやしやごに
 いたるまで、子だから持の分限となり、ながく豊年をたのしみ
 けり。

へこれから他人にもませて白げましやう。

○親慈悲連枷

へどういたして、酒などは決してたべませぬ。随分土性骨に
 こたへております。

へ飯はしらけを嫌ず、むすこはまじめを嫌ず、善をすゝめ悪
 をこらし、上分限にしたてるは、やはり米の糲糠を落すとお
 なじ理屈でおしやる。

へこの子めは堅い子めた、など、親父相応な口合をいふ。
 へまだ新米やらうだから、気のへるほど実の糠をとつておく
 れいな。



畑右衛門親子はかく目出たく栄へけれども、種蒔屋権兵衛は

子ゆへの間に迷ひしより、丹精したる苗太郎を失ひ、夫婦おた

すけ踊りにいで、その日くくの露命をつなぎけるを、畑右衛門気

の毒に思ひ、段々異見を加へて身の倅を分与へければ、権兵衛

夫婦は地獄で仏に逢うたる心地して、青菜に塩をかけたる如く

小さくなり、畑の隅に片息になつてゐたる苗太郎を尋ね出し、

荒たる身代を畝ひ返し、仁義礼智信の苗代をしかへければ、苗

太郎再び芽を出し、親子めでたく栄へけり。されば畑右衛門は

女房の田地を選ず、たゞまことの道をもつて子たねを蒔き、ま

ことの道をもつて養ひけるゆゑ、老ての喜びあり、権兵衛はも

と色欲に迷ひ道ならぬ子たねをまき、不義の財をもつて「こや

し養ひけるゆへ、老て後悲みあり。全て子を養ふは百姓の耕作

のごとく、よきもあしきもめんくの手入次第なるべし。花の

お江戸の子供衆は百性の関難を知らずして、しやりくいふ飯を

くふ。子を持つて親の恩をしるごとく、われ百姓の業をせねば米

の飯のありがたきをしらず、故にこの草子を現していらざるお

せわをやくことかくのごとし。

(十四ウー十五オ)



○一 生の豊年

〔十五ウ〕
今年やよい年豊年とうしでのジヨテコイく、せなよ精だ

せことしのくうれはのジヨテコイく

お江戸の御繁盛は土一升金一升でござりますよ、同じこと

なら金のほうを下さりましたよ。

ヤレくきのとくな、サアくしんぜましやう。

〔十五ウ〕

李紳が農を憫詩に云

鋤 禾日当午。汗 滴 禾下土。誰 知 盤 中餐。

粒粒皆辛苦。
豊年出現大穀田 (以上振り仮名原文のまま)

此詩の意は、六月炎天の昼中に畑をすけば汗したりて土をうる

おす、誰かその丹精を知ん、椀の中の飯一粒たりともみなこの

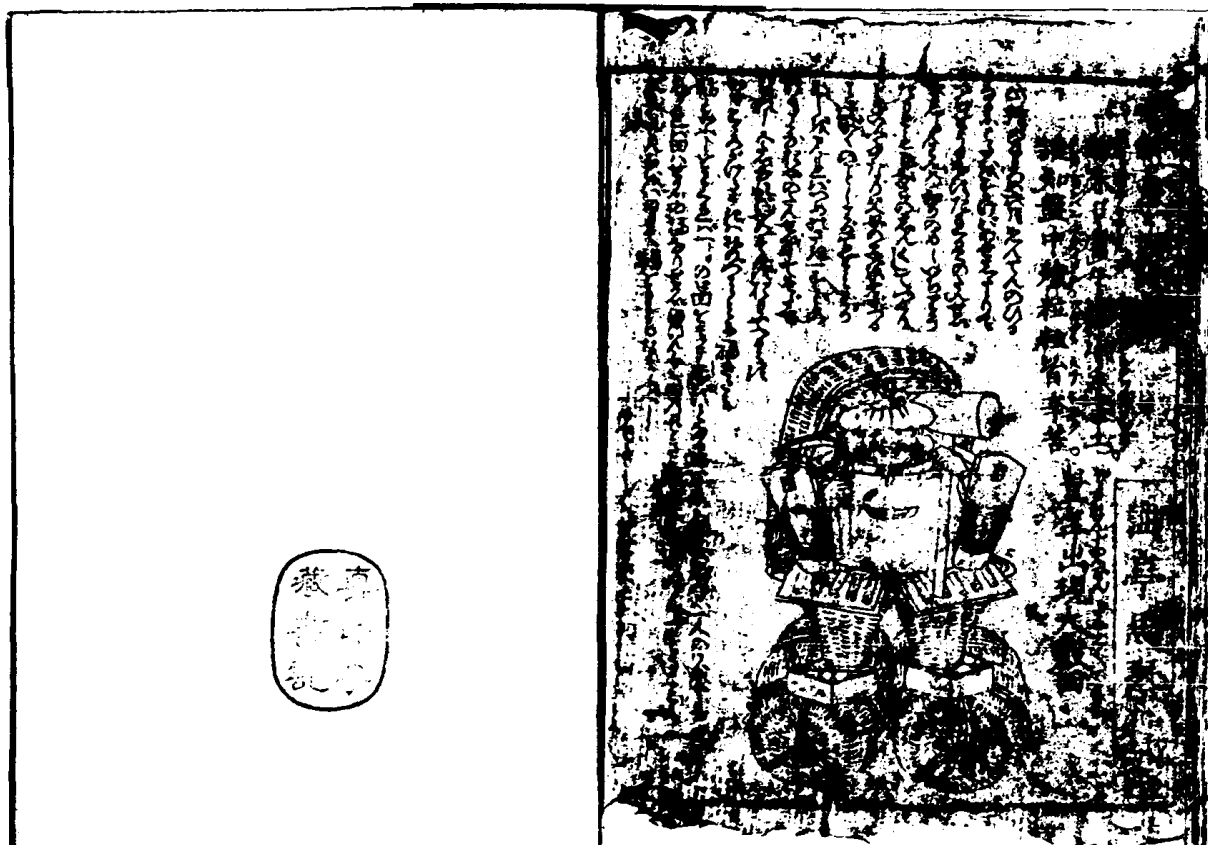
辛苦して作りし、といふ事なり。父母の子を育てること又かくの

ごとし。わが手を見、わが足をみれば、爪の先一筋の毛も皆親

の丹精して育てられし五体なればおろそかに思ふへからず。か

く心がける時はおのづから身に福きたる。福といふ字を分ば、

〔十五ウ〕



一トリの口田をモツテ(しめ)示す、となる。田一枚あればまい實に一人の口をやしな養ふべし。しかれば田は世界の福なり、世界の貧福田の出来不出来できふできにあり、めんくフ図するところの大こくでんちをいの祈りて、福をもとめたまふべし。めでたしくア、めでたし

曲亭馬琴作

野夫鶯歌曲訛言

(一オ)

(振り仮名・句点は原文のまま)

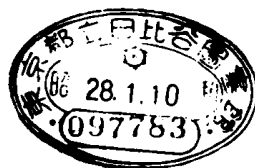
東坡が雑纂に狂対あり。謝氏が雑俎に弄言あり。むかし山谷茂叔が洒落を風月に譬へ。今の三蔵媚八が謔談を暗闕に諭ふ。阿談何ぞ容易ならん。予偶寒飯の腹を縉。阿竈の前で三たび咲ふて。以者冊子を作る。もし人在て巻を開ば老實的漢雷を聞ずして臍を抱へ。三平二満醴に酔ずして頭を解ん。仮令家翁苦虫を食潰し。閻羅抹香を嘗るといふとも。争噴飯ざるを得ん。謡へば俳優の小曲の如く。听ばそのま、読售に。似たりや似たり花の春。筆にまめ鳥の百囀。雑劇しらずの野暮鶯兒も。和ぐ空の天氣に伝奇。彼李翁の戯文に做ひ。他の伝奇を普通に編も是亦馬琴が一癖耳

享和二年王月上浣

著作堂馬琴識

(二ウー二オ)

(二オ)



享和二年王月上浣 著作堂馬琴識

東坡が雑纂に狂対あり。謝氏が雑俎に弄言あり。むかし山谷茂叔が洒落を風月に譬へ。今の三蔵媚八が謔談を暗闕に諭ふ。阿談何ぞ容易ならん。予偶寒飯の腹を縉。阿竈の前で三たび咲ふて。以者冊子を作る。もし人在て巻を開ば老實的漢雷を聞ずして臍を抱へ。三平二満醴に酔ずして頭を解ん。仮令家翁苦虫を食潰し。閻羅抹香を嘗るといふとも。争噴飯ざるを得ん。謡へば俳優の小曲の如く。听ばそのま、読售に。似たりや似たり花の春。筆にまめ鳥の百囀。雑劇しらずの野暮鶯兒も。和ぐ空の天氣に伝奇。彼李翁の戯文に做ひ。他の伝奇を普通に編も是亦馬琴が一癖耳

むかしくあつた土佐ぶし豊後の国の国主上瑠璃哥之介め

り安公と申奉るやんことなき御方おはしけるが、至つて長哥上
るりがお好にて、万事の御用も上るり長うたの文句にて仰せ付
られけり。また奥方ぢぐり御前は、ぢぐりの判官かる口公の御
むすめゆへ、これも何ことによらず地口で申上ねば御氣に入らず、
とかく奥使ひ」表使ひの口上も、長哥と地口がこぐらかり、
度々まちがひければ、御家老達相談して、此上は上るり長哥の
文句を地口にて申上げなば殿様奥様の御意に叶ふべしと評議一
決して家老の面々毎日哥上るりの地口のみ稽古しけるは古今
まれなるア、よい鼻つたらしだ。

局もちか ぢぐつて尻をつほねるといふ地口がでたれど、哥
の文句の合ぬゆへさしひかへている。

へ家老のめんく、半日外記太夫、地口の次郎、いづれも口
の重そふな手合なり。

「二ウ―三オ」

お台所の賄い方坂尾三源太といふ人出入の八百屋二上り屋三右

「二ウ―三オ」



衛門を呼寄せ、御用の青物をい、付けるが、自分の名前のさか

を三源太はどうやらたか尾さんげの段の地口のやうなれば、青物の注文を高尾の文句でこぢつける。

へもみゆばの。あをなにしめぢなすこがし、くずはもやしになしからし。世はなたまめのしなくに。わさびおやはすのねの。まめにしそみしこいのふき。おかべもやらぬながいもうきみ。

うりぞくはいぞつとぶ」のわらび。玉子のんでもきのこから。

うどがとをらぬゆけふり。だいこあかさぬびわとでもなし。

ひとのわかめとくるみはほんに。しんこしんぎくふのせりは。

しきのこんふはくろこまや。チヤン〇この品々を持参おしやれ。

へいやはや恐れ入ました。以来口三味線でも稽古いたしてまい

りませう。

へどうじや、身共が口合は奇妙であらう。

へ長唄あればめりやすもあるは。夜前のふろの中はどうぞでござ

りませう。

(三ウー四オ)

(二ウー三オ)



さて其次へ罷り出たるは、これもお出入の魚や船川久兵へ、さ
 いわい梅川忠兵への地口に聞へれば、一番もちつて値売をせん
 と、持て来りし注文の魚を梅川の道行にてぢぐりちらす。商売
 にかけては五ぶも好ぬ手合なり。

へこちうをの。さめかやいかはふぐかれて。すぐきこはだはな
 けれども。いをしのぶみのあぢやさば。ひらめをつゝむほうほ
 かぶり。おこぜをいるか「ゆでだこか。なれぬ鯛ぢをするめか
 いたわるいさなゆきかさご。こゝへる手先ふなころにあゆなめ
 られつあゆなめつ。いしなぎますをしほびきの。山とはこひぞ
 とふるさより二の口ばらにきすにける。

○右の通りに御座候、以上。おきやアかれ、とんた書たしだ。
 へ上々とみもと御せんざかな、この所へ出張たり。お取次頼み
 上ます。エヘンく。

へもみぢどん、一寸きゝな。あの魚屋はいつぞやの飴売よりお
 もしろいわいな。おいらが旦那様にもおきかせ申たい。
 へおみともぶぜん太夫でもわれらはとりつきもじ太夫でござる。

(三ウー四オ)



ある時ぢぐり御前お夜詰のつれぐに、奥付の役人よしはらすゞ兵へを召れ、其方若き時吉原の遊女をもとめしこともあるべし。色里の趣くはしく申せと仰にぎつちり、サアそれは。あそびの話か所望じやぐくチャ、チャンくと口さみせんになり、よしはら鈴兵へ迷惑そうに吉原雀でおはなし申す。も一つまけでチャくチャンく。

へおよそおごりをはやすこと。けいせい天王の御宇か」とよ。

女郎四人の末の秋。うそ八百の客人にて。初会にあやまるもうせうゑ。ふりねのどこにあらねども。ぶざもくやしきひとりずみ。さやのあぐらにあだ思ひ。かんしやくがやかましい。おもてで笛ふく按摩はりのりよぢ。まよひほれたるとでかんどう。

愚痴な衣裳に下られて。奥の禿が祈請だし。すかん其夜はむりざけの。じれつゝゝゝけの大ふさぎ。手酌ぞめきで。ゑてすがすぎたひつてんさん。とんだくけくゑ。

へこゝろの芸無猿思案もなくほめてゐる。やんやくゝ、至て古風なほめよふた。



へアハ、、アハ、、アハ、ノアハ、アハ、ノアハ、ア

ハ、アハ、アハアハアハヨ、これが七草の地口笑ひなり。

へア、おなかがいたひ、アハ、、

へおそばの女中たちみなこたへかねてふき出す。ヲホ、、

フ、ハ、、

〔五ウ〕

こ、にまたぢぐり御前のお腰元、歳やうく十三にて歌も地

口も一功な者なれば、まづ岡崎から稽古するがよいと朋輩女中

に勧められ、折ふし宿へ使をやるとて文の文句を岡崎にてぢぐ

つてやる。

へお変りなしかお変りなしか、お変りなければよい天気、お変

りなければよい天気。

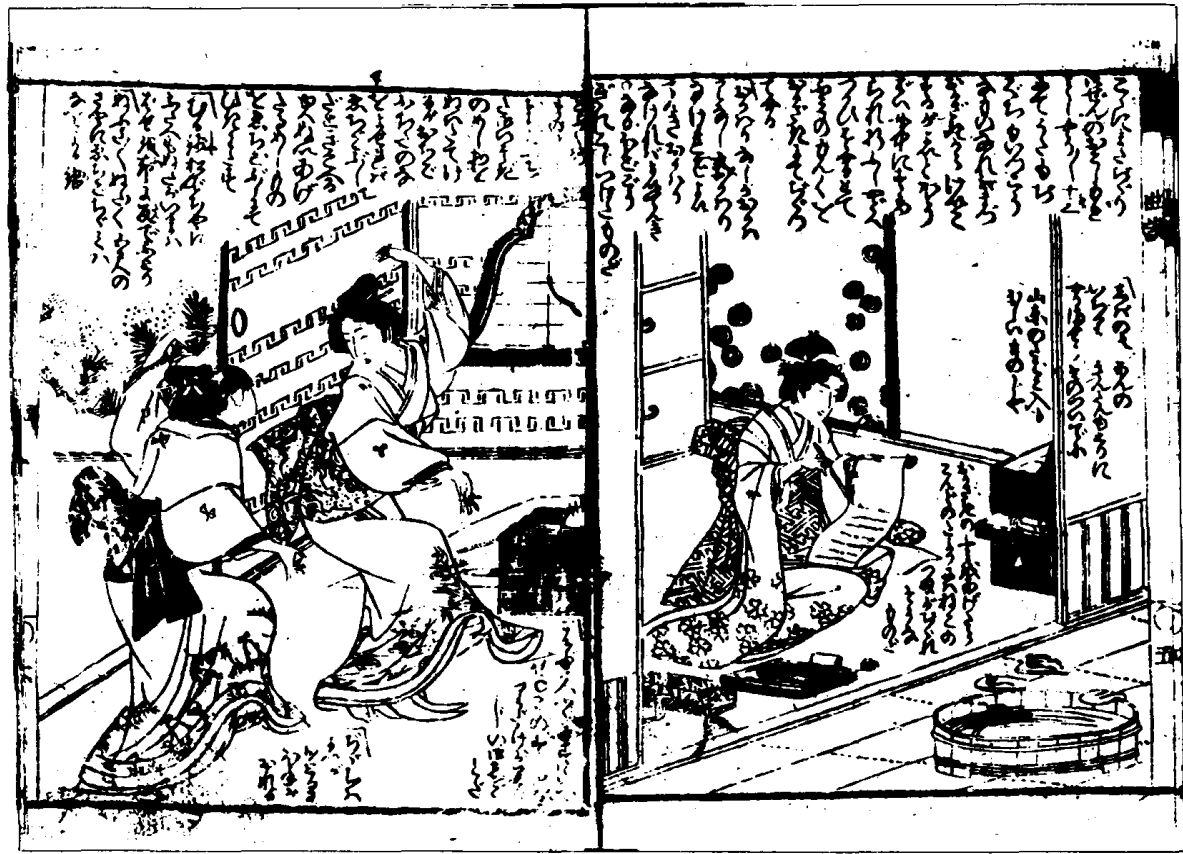
○なるほど豪気にこじつけたものだ。

へ柴の太一あんの一粒金丹もとりにやりませう、そのついで

に山東のたばこ入もほしいものじや。

岡崎の文をあげたら今度の便には猫の妻がぢぐれそうなもの

〔五ウ〕〔六オ〕



だ。

(六オ)

呉服(ごふく)の間の女中おちごふちた、御急(いそ)ぎの召物(めしもの)を縫立(ぬいたて)けるが、おちごふちたの名(な)を寄(よ)れば、ちごぶしだと聞(き)へる故(ゆへ)、縫(ぬい)上(あ)たる召特(めしもの)を越後節(えちごぶし)にて引渡(ひきわた)す。

へむか紗(しや) 松(まつ)ばちやにふたへもぬたが、いまは芭蕉布(ばせを)に反(あ)でふとり。

へぬふたくぬたく五尺(ごせき)のさやに、越後(えちご)ちみはなをよか組(くみ)。

へはぶたへふくさすゞしでせ○このすゞめおどりだけが臨時(りんじ)の御(お)しごとだ。

へぢぢらはよいが踊(おど)るにはねが折(お)れる。

(六ウー七オ)

上(あ)るり哥(あ)の介(あ)めり安公(あ)したいし野(の)にて毛物狩(けがり)を催(もよ)し給(たま)ひ、かなつめ村(むら)にて獲物(えもの)をいちく御(お)らんある。めりやす公床(きょうじ)凡(ぎ)にかゝり、こゝは所(ところ)もしたいしのかなつめ村(むら)といふなれば、これ白石(しろいし)の七ツ目(ななつめ)と申(まう)す地口(ぢぐち)に叶(かな)ふたりと、その獸物(けだ)を地口(ぢぐち)でいはず「へ赤熊(しやぐま)をおくるきつね火(か)に。鹿(しか)のめつくるからすねこ。わるいと虎(とら)やらきにかゝり。お豕(ふた)りさまは小牛(ごうし)なつ。ゐのこはむじな狼(おおかめ)なり。おそばに犬(いぬ)かと、山(やま)じや。つがひねずみのその中で。豹(へう)ばい獸(じゅう)のからし、が。とひおそ馬(うま)のたびとに。かな狒(ひび)々はなし聞(き)せたり。またしろ馬(うま)のよいときは。うさぎ象(まう)なかも鹿(か)で。もう何年(なんねん)で貂(てん)があく。牛(うし)へ狎(おん)だらたれ猿(さる)と。女牛(めうし)になつて野牛(のうし)でと。みぢまい部屋(べや)の白沢(はくさく)を。きくたびむくはいつぱいの。たぬきはおちて尾

白鳥。といてけものでかくせども。むかふかはうそるのし、の。

犀（まじ）で熊（くま）が身のうへ。下略

「イヨおらが殿様大明神、ありがてへと申す、こいつは地口（ぢぐち）でもなんでもねへ。

「コウほうづえをついたところは野郎（やろう）の如意輪（りよりん）観音（くわんおん）と他（ほか）みへめへナしかしおれもよつほどかたるもん太夫。

「勢子（せこ）の者感（ものかん）にたへ、思はず口三味線（くちさみせん）をぢくる。

「せこてんでんせこてん。

〔七ウー八オ〕

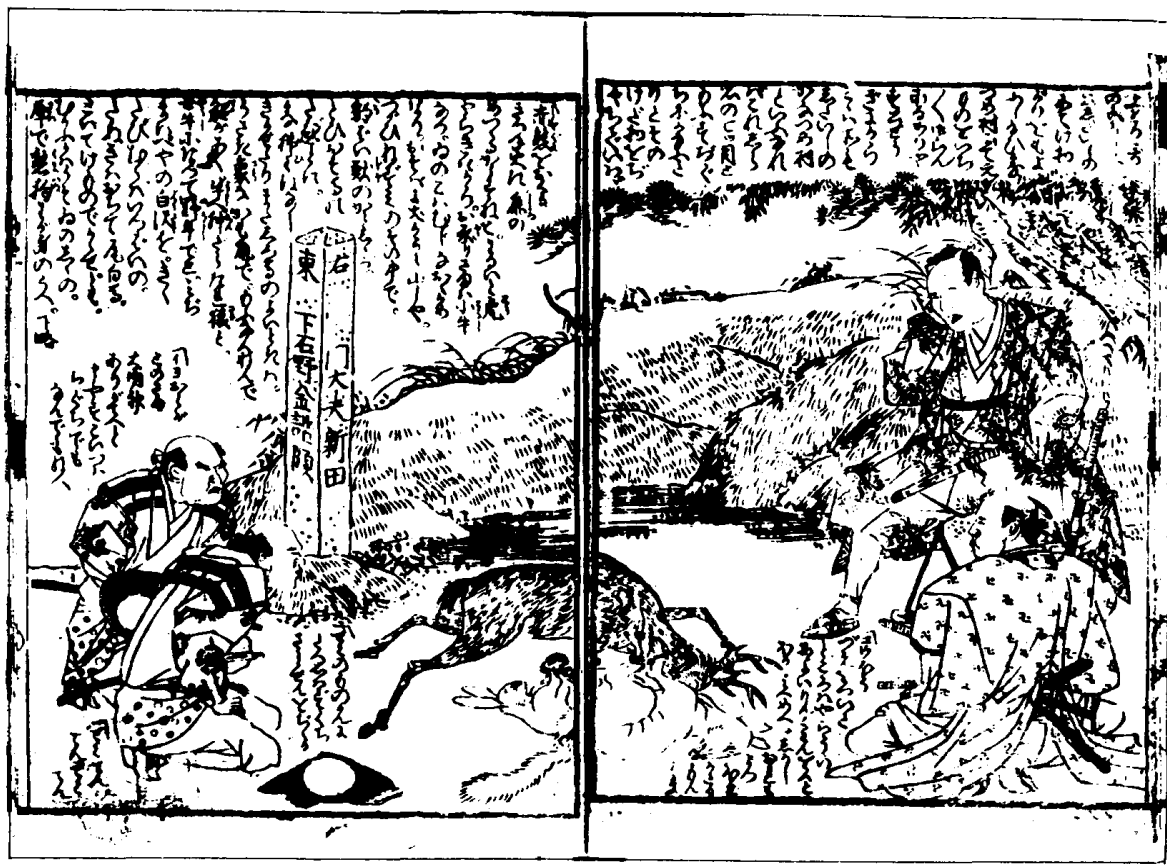
此折（りやう）からめり安公（あんこう）の領分（りやうぶん）むく兵衛（べいゑい）といふ庄屋（や）の子に戸庄次（とづかじ）といふ者（もの）、ひるてんをもつていろくの鳥（とり）を捕（とら）へければ、早速（さつそく）

国主（くにぬし）めりやす公（こう）へ献上（けんじやう）しけり。されど其鳥（そのとり）の目録書（もくろくしょ）も長唄（ながうた）の地口（ぢぐち）でなければすまぬこと故（ゆへ）、これには戸庄二（とづかじ）大きにてこずり、

一家（いっけ）一門（もん）寄集（よひあつ）りさまぐくと相談（そうだん）しけるが、とかく庄やの子むく兵衛戸庄二（べいゑいとづかじ）と続（つづ）けて言（い）ば京鹿子娘道成寺（きやうかしのむねみちのうら）のぢぐちになる、これ

は一向京（いっけうきやう）がのこのぢぐちにて目録（もくろく）を「書（か）くにしくはなしと、即（すなは）

〔六ウー七オ〕



ちこじ付の目録を添てかの鳥をさし上げければ、めり安公御よろこび限りなく、御褒美として読売の編笠一蓋を下されける。

庄屋の子むく兵へ戸庄次

とびのわけさぎさぎもあふむを伏あみどりでかりをめじろのよしきり。はとのみさごはうそでやはらぐ鳴しまどりに。つぐみすゞめは。たれをふくろのつばくら。ばんのほじろの。しゆもくもずより。なひわよ鶴に。かよひ木つゝき。からすだちからむくのはやぶさ。それが鴻に音呼びやほうわうみいよう。よたかゆきどり。しものせきれい。ともに小づらを。なじみかさ、ぎ。なくは山ばと。たゝ、鳧かれと。おもひそれ鷹燕雀。

へとう庄次の献上には古人のしほつけてあげるものだとさ。

へいつも一ツとかく所へは、てんてつとんくとかいておきましやう。

これはめづらしい鳥じや。

へにわこくの名がしれぬ。百性なくきがしれぬとは此ことだろ。

〔七ウ一八オ〕



作者やうく一冊半ばかり書上げたる所へ、板元の小僧たね本の催促に來り、此趣向を見かじつて歸りしが、通町の屋台店に鹿子餅てんふら鳴焼といふ行燈のあるをみて、どうやら桂川連理「柵といふ地口のやうなれば、小僧屋台店の食物をお半長右衛門の地口にてかぞへてゆく。これ仙鶴堂の子供はじやうるりをさへづるのたとへなるべし。

へいぢがきたない飯のつき。くふてゆくのは何ぞと問ば。つひとこたへてきなこ餅。それはふりにし小豆もちこれは桂の水あめに。うきふをながすひとりみち。小せんを袖に生姜切。ふうみそぐはぬ食合せ。のぞく屋台の軒もはや。こよい限りのはした錢。さしにも名残しるこもち。よきがなるにもかづくの。目に入る菓子に誘れて。あれかすでらのかきのかず。九つのどにきたうなぎ。ぞうにの十ヲやてんふらの。火かけかすかにみふくもち。下略

へこれおさつ。こゝは三ぼんあたまから。つゆの甘酒うり所。みちくもくふとをり。せうがきりこそ喰ねばならぬ身の上。



いはゞ十四や十五文のそなた。いつしよにしぎやき。みかんのひとのやたいのだんごはいもはねど。おとしのおもはく玉子のなげき。そばはこれよりたけのかは。わがはきだめをとふてたも。おでんかへりやく。

〔九ウ—十オ〕

さても浄瑠璃哥の介めり安公は次第に地口にのりがきて、とかく口あいは酒をのんで口を軽くせねば言れぬと、毎日大酒にふけり給ひしを、ぢぐり御前折々御みけんありしに、めり安公なんのその顔でのでと仰せられしは、とりもなをさず壇浦兜軍記の地口なれば、ぢぐり御前阿古屋琴責の段にてまたく諫めたもふ。

○なんのそのかほでのんで

あくぎおとゞめのだん

たこのあしこはしといへど。これをくはゞ味あらん。はもの骨おほしといへど。これをむしらばくはれなん。酒をのますること徳利にひとし。しやれはおさまる盃の。なをも四升をいたじ

〔九ウ—十オ〕



めの。のど元もときよき堀川御酒。とふじのたまくの剣菱けんびしにゑつて。

いちぶのちやうしたろうのめ君。きんり酒後(しゅご)のよはかんとして。かねては美味(あじ)のはしさいばん。いざこざのさからいなく。

いちのきたない榊飲(ますのみ)は。つまらぬお身そと御いけんある。

へつぎに控(ひか)へしはんさん六合、ちと助すけてくれる気はなしか。

へこつちはあいしやくに相ならぶ。いやじやが三合のめたか
でござります。

〔十ウ〕

お氣きに入いりのお傍医そばいしや者意氣の三久一ひやうか日病家をかけまはり、草履ぞうりはさゝらのごとく、足あしはすりこ木のごとくになりけるが、つひぞこれほどの大道みちを歩あるいたことがなければ、話はなしの種たねによく日御ひごぜんへ出て一日いちじちの道のりを申上まをル。

みちのなんじう

へちと精せいをいだすやつ山にあいたや三田や、小石川根津からいとぬかるみや、千種(ぢゆ)こんとん本所魚(ぎよ)らん、みめぐりさめつ大木戸を、きいてびつくり山谷さんやへまわる、さかみちつひくの

〔十ウ〕〔十一オ〕



ついで、赤坂四つ谷みち、それかこうじまち井戸ぐるひ」

へくすりといふは医者かのふ、ひまじやかのふ。ぱつちかたいこか、ひとりでもどろか、もふくくくこりずにたべ
としばし人めのくすりばこ、やぶのよの中やぶのよの中。

へこう踊つては目かまふはへ、おどりめんけんせざればそのやたいいけずだ。

〔十一オ〕

こゝに足軽ひがし八蔵といふ者つくく思ふやう、我身はいやしき足軽なれと、地口の家に住へながら、一口も地口
らぬは近比遺恨のことなりと心づき、ある日夜食の膳を見台にして、ひかし八蔵の縁をとり昔八丈をうなりちらす。

へそりやきこへませぬさんまさん。そもや干だるいなれそめは。くはふやくふのことかいな。夜食にすまぬその時にふ
つともとめて恥しい。こひのあら煮をたもとから。そつといも煮のとろろでは。せつちんさんへ願かけて。おへをいつ
こうたれたぞへそのもたれやらおかしいおくび。二せんも三せんも又さきの世も、ちやいりし仲しやないかいな下略
へこれが諺にいふ義太夫ときのまづいものなしだ。たれそうまいと褒めてくれ、いゝ子だから。

〔十一ウ—十二オ〕

家中の侍多きなかに、葉室多仲といふ儒者あり。此人和漢の博学なりしが、あるときめりやす公多仲をめされ、そ
の方これまで講釈をいたしたる和漢の書籍はなにくぞと問せ給ふに、さすが博物家の儒者なれば葉室多仲のひゞき
をとり、かむろ立の文句にて書物の外題をぢぐりしは、じゆしやアばからしい学者なり。

へ四書のすへ。史記のながれとみのゆくへ。漢書だちから旧事

記にすめば。たゞ「医書」となくあけられて。古事記くりだす

雅さだめ。経は花譜つけ左伝とめの。もん日孟子をかぞへてあ

かす。瑣綴録。論語まつよは詞花集で。武備志なるよの非子哥

書よ。夫木なるほどあいそめ国語。おもふに楚辞でおもわぬに。

荘子ゑんなら尚書こがないぞへ。ゑんなら宋史。唐詩選なら講

釈がないぞへ。おもいあふたる家語のなかだち。(振り仮名原文のまま)

へ先生は第一お声が妙でござります。

みなく漢儒いりました。

へめりやすは古学漢どころに声がいらしますて。

へ和書のあいのは、源氏ちん湖月んく、など、ひくが良

うござりますかな。

(十二ウ—十三オ)

こ、にまた尾上新内といふ普請役、ある日作事の大工ばらを

召連れ、御殿長屋の繕いを検分しけるが、修復の注文書も新内

節の文句にてこしつけける。その文句にいわく、

(十一ウ—十二オ)



へおもやはゆどのしやくりあげ。ふしんごやをゆはしやんす。

ゆかにながやのみじやとても。小ばりにふろ戸ないわいな。た

とへ火の見はうけだされ。ごふしんさまよおくざしき。」木戸に

板間いたまやかしつかれ。いへみぬわしで蔵くらそより。やねうらゑんか

らてかべつけ。うちのひきまどじやうぶむき下略

へいつぞやしたみひさしのよ、大工さんがたせいだして、細さい

工くの中でこなさんの、たばこ休みやすや昼飯ひるめしの、おもしろいざの

うちやうじや、きいたらしいとかなづちには、とはどうだ。

へ大工さんの入札いれふだを日かはい、たび占うらやさん、とはこのこと

だらふ。

〔十三ウ—十四オ〕

かくて一家中いっかちゆうしもぐまで、猫ねこも杓子しやくしも長唄ながうた浄瑠璃じやうるりのもぢり

をいわぬものもなく、お庭掃除にはそうぢの奴やつこらまで夜鷹よたかの話はなしを執着しゆうじやくのも

ぢりにて話はなしている。これよたかにしうじやくのし、くつた報むくろ

といふこじつけの題取だいとりなり。

へはなとびなうくだくるとも人しらず。われもかよふや」たま

〔十二ウ—十三オ〕



くに。しき折介のたはむれは廿四文よ。せめてしばしは手に

とまれ。ねがへればはらのこかげにみへつかくれつ顔やつれ。

すがたきたなきなつよたか中略

へ大部屋人の底あぐら。ひとりでかぶる冷酒の。重のまぐろや

焼まぐろ。しりのかげさへあざしがた。ちとひへるから鼻す、

り。うでのいのちの墨まくら。たが小ざいくや。にくからぬ。

うりわらじなわだわし下略。

へこちとらづれのふだんのみきん、ぼたんのすいものにほい

みちく、給金にたんの部屋頭トテチンくチテくツン

へめり安公もの、ひまよりこれをき、給ひ、はなはだ感じ給

ひ、御ほうびとして豆蔵頭巾ひとつづ、くたされけり。

へしもべは口のちやがなれないものと思ひの外、ぢぐるものだはへ。

〔十四ウー十五オ〕

されば家中の諸侍、我劣らじとぢぐるといへども、一体地口

の趣向がせまく、哥上るりの文句に合せ、魚尽し鳥尽しとそ

くこじつけられるものでもなく、後には家中の面くより第

〔十三ウー十四オ〕



一作者が大きいにてこずり、止はに困るほどなれば、まして口の重ひ御家老やお局たち、用はあれどもぢぐられず、互に顔を見合せて口をもぐくするばかり、その様こがしを大ぐちにほうばつたるがごとくなり。」

へかゝる難義のその折から館の鎮守稻荷の神体うがのみたまの神忽然と現れ給ひ、善哉くもすさまじいが、われはこれうがのみたまといふときは、ふさ（圏点ママ）の潮来の地口に似たれど然にあらず。あまり見兼て現れたり。すべて地口軽口も折ふし言ばおかしく聞へ、ねてもさめてもぢぐつてはかつぱの屁にておかしくなし。こを悟つて地口をば初午の行燈よりほるは無用じや、みなさらば、との給ふ声と諸共に、草子も三冊十五丁のかみはあがらせ給ひけり。

へいろく用談もござれど、地口で言ぬはお家のご法度、サアなんと仕つろふ。

へかやうの時は毎日油揚をたべてもとかく口がすべりませぬ。へおくさまの御意あそばしますのには、アノあととはぢぐちを考へて明日申上ませう。

〔十四ウ—十五オ〕



へお使者ししやご苦勞くろうに存ぞんじます。とくと地口ぢぐちを考かんへてから御口上ごこうじやうのおもむきを申まきかせませう。

へわたくしとてもその通りとを、よい地口ぢぐちもでませぬから、かよふにいなごのあまいぬ、狛犬こまいぬをみるやうにいたしております。

〔十五ウ〕

めり安公あんこうもぢぐり御前ごぜんも稲荷いなりの御告つげありがたしと、これより地口ぢぐちをやめたまひ、たゞ二月初午はつばかり長唄ながうた上るりは勿論もちろん、いろくの地口ぢぐちを考かんへ、行燈あんどうに書付かきつけていだし給たまひければ、家中かちゆうの人ひとくはじめてあんどこの思おもひをなし、お家いへばんく歳せいと栄さかへけり。今も二月初午はつには上るり長哥ながかなどをうたひ、地口ぢぐちの行燈あんどうをいだしこと此こゝ因縁いんえんと、久ひさしいものだがめでたしく。

へ是こゝからまじめになつて俳諧はいかい節用抄せつようせうでもみていましやう。ありがたやく。

へひやうひやくな人の地口ぢぐちをやめるは上戸かみどの酒さけをやめたやうなもので、いつこいつこう気拔きぬけがしたよふだ。

子興画 曲亭馬琴作

〔十五ウ〕



ろくさつがけとくやうさうし 六冊懸徳用草紙

(一オ)

(振り仮名・句点は原文のまま)

(上段) 五大力三畫訓読序

禍福大門なし。只客の招く所に通ひ来る。日本堤も唐天竺と。
恋ゆゑに躬をやつし事。古人訥子が名を止む。五人切粉のみせ
煙草。さつま国府も上州館も。のめやうたへや浮世車。まはら
ぬ筆の長烟管。吸つけて出す格子先。洒落なんすなが身にしみ
く。口と中とはしら雪と。是墨附の十五張。ちと珍らしく老實
に綴りぬ。

壬戌春帝端月

著作堂馬琴述

(下段) 売切申候切落咄序

夫はなすこと難し勘平が二つ玉。武智が大筒。時として猶あた
り外れあり。和泉三郎が空鉄炮は。五斗兵衛が寝耳を貫き。戯
作者のあてづつほうは。子供衆の目を覚す。明の烏の元日から。

(一オ)

ろくさつがけとくやうさうし



五大力三畫訓読序
只客の招く所に通ひ来る。日本堤も唐天竺と。
恋ゆゑに躬をやつし事。古人訥子が名を止む。五人切粉のみせ
煙草。さつま国府も上州館も。のめやうたへや浮世車。まはら
ぬ筆の長烟管。吸つけて出す格子先。洒落なんすなが身にしみ
く。口と中とはしら雪と。是墨附の十五張。ちと珍らしく老實
に綴りぬ。

壬戌春帝端月
著作堂馬琴述

賣切申候切落咄序
夫はなすこと難し勘平が二つ玉。武智が大筒。時として猶あた
り外れあり。和泉三郎が空鉄炮は。五斗兵衛が寝耳を貫き。戯
作者のあてづつほうは。子供衆の目を覚す。明の烏の元日から。

壬戌二月 曲亭子

今茲も替らず筆をとる。多くの中で此作の。落し咄や口合の。

おもしろいやらわるいやら。しらぬが佛の方便品。嘘はしやうちの妄語戒。破つて揉でその後は。紙屑籠に。入る、もま、よ。

壬戌正月

曲亭子

六冊掛徳用草紙のよみよう

四文銭を三文に売ば一文損がゆく。四文銭を四文に売ば買手がなし。こゝをもつてやつがれ此春の趣向といつば、草子三冊にて六冊に對ふ徳用の新作也。その読様はまづ上の巻から下の巻迄上の段を讀でしさい、また繰返して上の巻より下の終まで下たの段をよむなり。上の段と下の段を必ずいつ所に讀つこなし、よむと直にお父さんへ言付てやらあ、以上。

五大力の上の巻

むかし足利家大尉たりしとき、相州鎌倉に勝間源五兵へといふ

ものあり。其先祖をたづぬるに、鎌倉の管領足利基氏の執権

畠山入道道誓が 老臣にて、勝間將監とぞい、ける。今の源五

〔二ウ一オ〕



兵へまですでに七代におよびしが、此とき足利の天下やうやく衰へ、諸国の大名蜂起せし」時節なれば、源五兵へが祖父の時より浪人して鎌倉の郷士となる。源五兵へ父源二兵へは先だつて世を去り、母刀自一人もてり。妹を八ツ橋といひ弟を源次郎といふ。源五兵へか生れ付其心ざしたゞしく、兵法剣術に妙をえたりしかば、近国の諸士を集め、もつぱら剣術の指南して世を渡りけり。

(下段) 切落はなしの上の巻

開帳

四五人寄集り、去年嵯峨の釈迦の開帳に豪盛に繁盛したじやアねへか。しかし嵯峨の釈迦の開帳年はとんだ暑い

が、あれはどふしたことだろう。 **しつたふう** それは知たことだ、釈迦は天竺の人だ、天竺は熱国だ」からお釈迦

がござると暑ひのさ。 **いぜんの男** 暑いことは熱国といふが、そして寒い国は何といふ。 **しつたふう** 寒い国

は寒国さ。 **ひとりの男** ひやつこいのは。 **しつたふう** 冷国といふは。ソレれいとは冷るとかくじやアねへか。

(二ウー三オ)

しかるに源五兵へが家に数代持伝へし名剣一ふりあり。此つるぎは新田左兵衛佐義興打じにの節まではき給ひ、五大力となづけられたる所の名剣なり。延文三年十月はたけ山入道、江田竹沢等に命じ、義興をたばかり、矢口の渡にて打とらんとせし時、源五兵へが先祖将監しきりにこれを諫めけれども、畠山かつて其ことはを用ひず、終に義興を欺むき殺し、首は京都へ送り、五大力の太刀は勝間将監へ預けけり。されど義興の靈魂この「剣をや惜み給ひけん、数年の間

あやしきことのみありしかば、源五兵へが祖父の時、此剣を菩提所の寺院へ納めけり。ある時源五兵へつくづく思ふやう、五大力は我家数代の宝なり、なんぞ空しく法師の手にあるべきものならんやとて、貯へもちたる金子に家財雑具を売足し、金五百両調へて懐中し、かのぼだい所に至り、五百金を祠堂金に寄進して、ついに五大力の剣を請受け、我家に携へ帰り、秘蔵することかぎりなし。和尚はうはべは否む躰なれども、心のうち秘かに喜び、俄に徳つきたりし心地して笑を含みていたりしとなん。

(下段) ろうにん

ある浪人お寺へ碁を打ちにゆきて、だんく取入り、近頃無心の至りにござれど、此間拙者主取をいたし、一廉の知行にありつきます。それにつき少く支度もいりますれば、金子四五両借用いたしたし。これは拙者が家重代の刀、正宗でござる。身にも替難き品には「ござれど、金子返済までお預け申ませう。武士の魂を預けおく上は少しも相違なしといふに、和尚かふりをふり、いや

〔二ウー三オ〕



くそれを預つては金をかすことはさておいて、そつちから二三百疋もとらねばなりません。〔らう人〕それはまた何故でござる。和尚寺で魂をあづかると法事料がいります。

〔三ウー四オ〕

こゝにまた源五兵へがいとこに笹野三五兵へといふものあり。これは源五兵へが先祖なりし将監が弟の家にて、近き親類なり。此三五兵へも剣術の指南して世を渡りけるが、妻は先だつて世を早うし、伴一人ありて数馬といふ。されど三五兵へは其わざ源五兵へよりは大きに劣りけれども、一体世事に賢く、門弟とよく睦み親みけるゆへ、門人もおのづから多くして、家富栄へぬ。しかるに此年の秋、源五兵へが母親、病の床に臥し、既に危くみへければ、源五兵へもち伝へたる武器馬具まで売しろなし母の薬の代となし、兄弟三人枕を離れず看病す。かゝる不祥の事の出来るも、かの五大力の剣を取返せしよりの殃ならんなど言ふ人も多かりける。かくて三五兵へも伴数馬を遣し置

〔三ウー四オ〕



て、共に力をそへ、そのみならず折く金子を贈つて薬代になさしめしかば、源五兵へ兄弟深く三五兵へか志を感じ、まことに再生の恩人なりとぞよろこびける。

(下段) むすめ

母親久しくぶらくと思ひてゐれど、もとよりまわらぬ身代なれば、年長た娘を毎朝薬取にやりしに、それからだんくのうらくになつて、とうくおなか大きくなり、二月三月は袖袂で隠せしかども、もはや五月からは隠し難く、これは毎日大飯をくつて腹の張たようにみせるがよいと、娘三度の飯を八九杯づつしてやるゆへ、おふくろの毒に思ひ、は、おや 此子はばからしい、こなたの腹には宿無しても居るそうだ。むすめ 宿無はいねえがの。は、おや そして何がいるのだ。むすめ て、なし子がたつたひとり。

(四ウー五オ)

かゝる医薬のしるしにやよりけん、秋の末にいたり母の病癒たりしかば、数馬も我家に帰りけり。こゝに源五兵へが妹八ツ橋は、いつしか数馬と深き中となり、兄親の目を忍び、此ころ契をむすびけるを、母刀自とくよりこれを知るといへども、互によき頃あいなりと見許して、知ぬ顔しておきしが、此ほど母の病癒て数馬も我家に立帰りしかば、今は互の逢瀬もたへて八ツ橋が物思ひたとへんかたなし。○さて又此とき上杉管領源五兵へ三五兵へ剣術に達したるを聞及び、兩人に試合させ勝ちたる方を召抱へんと言遣し給ふ。しかるに三五兵へ秘かに源五兵へ方へ来り、此度の太刀合 互の面目なりといふも、所詮我貴殿に勝つこと能ず、負る時は多くの門人も離れ、この末いかなる身の上にならん。わが亡きあとには倅数馬がことを頼み申といふにぞ源五兵へ、こは思ひ寄ぬことをのたもふものかな、我一旦貴殿

に受し恩もあり、心弱きことをい、給ふべからずと、互に卑下して立別れけり。

(下段) いろおとこ

いろおとこ 色男さる箱入り娘を見初め、とうく手に入れて、互に深きなかとなりしが、所詮此世では添れぬ二人が仲なれば、駈落して心中とでかけんと、ある夜しめし合せ、その支度をしたりが、**むすめ** お前これまで言交したことを忘れはしなざるめへね。**いろ男** そりやア言ずとしたことさ。**むすめ** ふたりが最期はひぢが原、未来は一つ蓮じやぞ。**いろ男** そりやアいわずとしたことさ。**むすめ** しかしお前、私を騙して売てしもふこ、ろじやアねへかへ。**いろ男** そりやアいわずとした事だ。

(五ウ)

すでに試合の日限になりしかば、鶴が岡の社内に棧敷を構へ、管領家よりは検使を立られ、八つ七郷の町人百性群り来りて見物す。両人すでに用意整ひ、一太刀二太刀打合ふとみへしが、

(四ウー五オ)



源五兵へが持ちたる木刀三つ四つに折れければ、張合もなき
 負となりぬ。三五兵へこれをみて、源五兵へ、今一度木刀をと
 りかへて勝負あれといふに、源五兵へ曰く、いやとよ、これ我
 不運なり、もし真剣ならばいかにせん、かゝる所に長居せんは
 面目なしとて、折たる木刀を拾いとり、逸足だして帰りけり。
 後に聞ば源五兵へが木刀は朽たるあかざにて造りしとなり。

(下段) けんじゆつ

呉服屋の若い者、剣術の弟子入をしければ、師匠まづ流
 義の型を使ひ分てみせ、これは表、これは裏、此てが冴
 れば大げさに斬申すと教ゆれば、**ごふくや** いか私商
 売が呉服屋でも、裏の表の大袈裟のとはおなぶりと存じ
 ますといふ。**しせう** 壁に指さし、あの通といふを、
ごふくや よく〜みれば、貼札を出してけんじゆつ掛値
 なし。

〔六オ〕

五大力の中の巻

〔五ウ〕〔六オ〕



さても源五兵へは三五兵へが一旦の恩を感じ、わざと試合に打まけて、すごくと我家へ帰りければ、母兄弟はかくともしらず、源五兵へ定めて勝たるべし、家を興さんこと此時にありと待わびていたりしに、案に相違して源五兵へが木刀をれ、三五兵へが勝となりしと聞へければ、みな興さめて呆れいたり。源五兵へこれを見て、人おのく禍福あり、よきも喜ぶべからず、あしきも憂ふべからず、何ごとも某存ずる旨ありとゆふに、母も少しは心とけ、親子三人酒盛して心のうさを晴しけり。

(下段) 切落咄の中のまき

ものわすれ

もの覚への悪い男、使にゆき、先の人のあて名を忘れ、大きに困つて向うからばあ様がくるゆへ、つかいもしくわしがゆく所はどつちでござります。ばあさまこなたのゆくところが知るくらゐならわしもまごつてはいませぬ。つかいそんならお前も行先がしれませぬか。そしてお前はどふなさるつもりでござります。ばあ様わしはこれから占を置いてみます。

〔六ウー七オ〕

母思ふようは、源五兵へが太刀合にたやすくまけたりしも、かの五大力の剣を取返せし崇ならんなど思ひめぐらしけるに、こは不思議や、そばなる爛鍋おのれと踊り出、梁の上にあがりて動かず、人くこはいかにと驚き騒ぐに源五兵へは見向もやらず、母親あきれはて、へさしなべに湯わかせ子どもいちひつの桧橋より来るきつにあむさんと、万葉の歌を口ずさみければ、此爛鍋からくと笑ひけり。源二郎は箒おつとり、爛鍋を払ひ落すに「俄に家なり震動して、火

鉢茶碗着類袴はちちやわんきるひはかまようのものまでもみな己おのれと踊おどりだす。八ツ橋はしは生いきたる心地こころちもなく母ははにひしと寄よ添そひいたり。されども源五兵げんごべいへはさらに驚おどろく気色けしきもなく、化物ばけものどもの集あつまりてつれ／＼を慰なぐさめ、よき芝居見物しばいけんぶつなれと、そら嘯うそきていたりけり。かく妖あやしきこと日々おほに多おほかりしかども、人に語かたるへき事ことにもあらねば、後のちには人々ひとびともみな目耳めみみになれて始はじめのほどには驚おどろかず、この故ゆへにや妖あや怪くわいもおのづから薄うすらきけり。

(下段) ばけ物やしき

ある日中ちゆうつ腹ばらな男おとこ、ばけ物屋敷やしきへゆきて見届みとどくと酒肴さけさかなをと、のへ、宵よひから一人酒ひとりさけを飲のんで楽たのんでいると、ほどなく八ツの鐘かねがごん／＼となるや否いな、そばなる戸障子せうじたくみ畳たたはいふに及およばず、行灯鍋釜箱小鉢あんどんなべかまはこばちにいたるまで残のこらずおどり出し、いろ／＼の所作事しよさごとをする。これは珍めづらしい竹田機関たけだからくりをみた、なんでも夜よが明あけたら此古ふるど」うぐをもつて帰かへり、両国りやうごくのみせ物ものにだして金儲かねもけをせんと、よの明あけるを待まつほどに、いつしか東ひがしがしら／＼としらみて、見れば入り口くちに札ふだを下さげて、御手ごてつけ、三日さんじつぎり。

〔六ウー七オ〕



〔七ウー八オ〕

ころは十一月廿日あまり、雪いたく降積りけるが、源五兵へ
 は用事ありて武蔵の方へゆき、夜更て玉川の辺を通りけるに、
 向ふより年若き大将白糸緘の鎧を着、月毛の駒にまたがり、手
 に弓矢携へ後に大中黒の旗をたてさせ、しつくと歩みくる。
 源五兵へ月かげにこれを見て、こさんなれ、この幽霊こそ我母
 を惱し此ころあやしきことをなすものなるべしと、袴の股立高
 くとり、汝何ものなるぞ、その名をなれと呼わりけり。かの
 大将曰く、これはこれ新田左兵衛佐義興なり。われむかし討
 死のとき秘蔵せし五大力の太刀を畠山に奪れ、ついに汝か先祖
 将監が手にいりしを心憎、思ひ、種ぐの祟をなせしかば、恐
 れて我住む山に納めたりき。しかるに汝山ぬしの心を蕩し、多
 くの金をもつてかの剣を取返したり。はやくその剣を我に返せ。
 源五兵へからくと打笑い、御身官軍の大将として何とて心
 いやしく一振の太刀を惜み給ふぞ。

(下段) ゆうれい

〔七ウー八オ〕



せんさく好キ 絵に描た幽霊をみれば皆腰から下がな

が、なぜ知盛の幽霊はかり足が描てあるだろう。 互かき

あれは海で打死した人だから、たこになりか、つたゆへ

幽霊でも足がある。 せんさく好 そんなら八本ありそう

なものだに、矢張二本あるはどういふわけだ。 互かきそ

こがたこになりか、つたところだ。 せんさく好 待つせ

へよ、平」家の大将はたしか蟹になつたせ。 互かき

イヤくたこになつたに違へはねへ。 せんさく好 たこに

なつたといふ証拠でもあるのか。 互かき ソレひよどり越

て皆一杯喰た報だ。

〔八ウー九オ〕

へイヤとよ惜むにあらず、義興ほどの大将が打死のとき太刀さ

へ佩ずといわれんは勇士の深く愧るところなり。もし早く返さ

ずんば汝が一族みな此剣にて身を果さん。へイナいかの給ふ

とも返すまし。へイヤかへせ。へイナかへすましと、終夜あらそ

ふほどに、いつしか夜もしらぐと明て、傍の松に白鷺の止り

〔八ウー九オ〕



いたるのみ見へて、又目に遮るものもなく、今こそ却て恐しく、身の毛よだちて帰りける。

○三五兵へは太刀合に勝て多くの知行にありつき、身の栄耀にや迷いけん、ついに一家の因を忘れ、源五兵へと其中うとくぞなりにける。このとき「管領家上洛あるべしとて、三五兵衛も供奉に召連られんとのことなりければ、三五兵衛発足の別を惜み、一門のともがら並に門人を集め、留別の酒宴を催しける。されど源五兵衛は此ごろ三五兵衛がていたらく快からざれば行ず、妹八ツ橋ばかりを遣しけり。八ツ橋は日頃恋慕ひける数馬に会い、喜ぶこと限りなし。

(下段) 上戸

そこぬけ上戸ある所にてしゆく、馳走になり、大きに酔てぶらく、帰る道、酒問屋の前に来かかり、また酒の匂を嗅でこたへ難く、そつと酒倉の中へ入り、鏡を抜てがぶくのんでゐる所を番頭見つけて、こは酒盗人よと立騒ぐを、**上戸** ぜんざいく、我はこれこの蔵の内の「酒を守る神なり。我きのふ水あげをした酒をきいてみて、相場をよく売せんと思ふ也。汝誤つて我を疑ふことなかれ。**ばんとふ** それはありがたふぞんじます。しかしそれはあまり粗末な仕合、別におみきお供でも。**上戸** イヤくおみきももふ飲ぬ。お供はなを喰れぬ。**ばんとふ** そんなら何を供へませう。**上戸** もし信心の心があらば、もふ此上は塩茶をいつばい。

(九ウ—十オ)

すでに酒たけなはに及て三五兵衛八ツ橋に三味線を好みければ、八ツ橋も数馬も今宵限りの逢瀬ぞと、心の糸竹弾鳴せば、数馬も共に声はり上げ、互の思ひを歌ひけり。その文句に、
へいつまで草のいつまでか、なまなかまみへまいらする たとへせかれてほど経るとても 中略 やがて会ふぞへ語ろぞ

へ、惜おしき筆ふでとめ候こかしく、と声こゑ妙たへにうたいければ人ひとくいとゞ
 興きやうに入り、みな酔あ伏ふして前ぜん後ごをしらざれば、八はッ橋はしかづ数かず馬ばはきぬ
 引ひかつぎ、はかなき夢ゆめを結むすびけり。」

○源げん五ご兵べい衛ゑと三さん五ご兵べい衛ゑが仲なか其のちはいよくあしくなりて八はッ
 橋はしかづ数かず馬ばが通つう路ろ絶たへければ、八はッ橋はしかづ明めい暮ぼ数かず馬ばがこを思おもひつゞけ、
 たゞ泣なきあかさばかりなり。母はは刀と自ぢ八はッ橋はしかづがかく瘦やせ衰おとろへたるを
 みて、或ある日ひいふやう、数かず馬ばとの中なかは我われも疾とくより知しりたるゆへ、
 ゆく／＼は夫ふう婦ふともなさんと思おもひるたりしに、みさげはてたる
 三さん五ご兵べい衛ゑが心こゝろ底てい、所しよ詮せんこれ迄まの縁えんと思おもひあきらめ給たまへと、言こと葉は
 を尽つくして諫いさめければ、八はッ橋はしかづはたゞ伏ふ沈しんみ泣なく

(下段) ぢしつ

ある娘むすめ痔ぢ疾ぢを患わづらいて痛いたみたえがたく、最さい早そく医い者しやを呼よんで
 容やう態たいを見みせければ、医い者しやとつくりと様やう子すをみ、凡およそ痔ぢ
 に五いぢとて出でぢいぼぢ走はしりぢなどあれど、それがし今いま
 りご玉たまの様やう子すをみるに、お腹はらは立たたれな、まつたくがさ
 のわ」ぎでござる。**むすめ** 苦くるしき声こゑ音ねにて、ナニかさじ
 やアねへ、かつばのわざだ。

(九ウー十オ)



よりほかに言葉なし。かゝるところへ源五兵衛よそより立かへり、母人聞給へ、八ツ橋も承はれ、我八ツ橋数馬が訊あることは疾よりしりたれば、ゆく／＼妻すべしと思ひいたりしに、**図**らずも三五兵衛我に一旦の恩ありながらその身の利欲に迷ひ、我を遠ざける彼が心底みさげはてたれば、なか／＼彼が伴に妻せんこと思ひもよらず。されどかく言ば互の情にひかれし八ツ橋が心根も不憫なれば、疾より衣服も用意して、数馬に妻せんがため、中だちを頼て言遣したり。やがていなやの返事あるべきぞと言聞せければ、母はもとより八ツ橋は兄が情の嬉しさにいと涙はせきあへず。

(下段) ゆかた

亭主壹分二朱にて浴衣を買てきて女房にみせ、これ見さつせへ、粹な縞だろふ。**女ほう** 当時はやりの碁盤縞だ

ね。**てい主** うんにや、こりやア将棋盤縞だよ。**女ほう**

碁盤と将棋盤はどこで違ひますへ。**てい主** 値段で違ふ



のさ。女ほう そりやアどふいふわけでござります。

てい主 銀三つで負かしてきた。

〔十一オ〕

五大力下の巻

此とき源五兵衛が門人瀧山勘介は三五兵衛が方へゆき、八ツ橋数馬が縁談のことを言入ルに、三五兵衛もつての外に立腹して、源五兵衛はもとより一家の縁ありといへども、彼は家貧しく一粒の貯へもなし。かゝるうつけの人の妹をいかで我子の妻とせんやと言ければ、勘介もさるものにて、いや然のたもふべからず。数馬殿と八ツ橋御寮はかねて深く言交せし中なるを、いかで素気なく返事し給ふ道理あらん。まづ数馬どのをよび出し、その心底

(下段) 切落咄の下の巻

客

長尻の客を早く帰さんと小僧箒を逆さまに立、をき、もはや帰る時分なりとそつと覗いてみれば、客は座敷にたわいなく寝ているゆへ、これはふしぎと箒を立て、おいた所へいつてみれば、いつか箒が横にとつさり。

〔十一ウ—十二オ〕

をも聞給へとい、ければ、三五兵衛理の当然にせひなく数馬を呼寄せ、汝不届者、親も許ぬ不義いたづら、真ふたつにする奴なれど、ひとり子ゆへ一命は許しておく。早く離別の文を認め遣すべしとせめければ、数馬は父の怒にせひなく、かねて取交せし起請文に離別の切文を添てさしだしければ、勘介これを受取り、此うへは力なして立帰り、すぐに源

五兵衛が方に参り、委細を物語り、起請と切文を渡しければ、八つ橋これをみて絶入るばかり伏沈む。源五兵衛つと立て、妹いたく嘆きそ、この上は我計ふむねありとて、かねて用意やしたりけん、弟「源次郎に言付け、嫁入の衣服を持出させ、八つ橋に髪結せ、かの衣服を着替させ、親子別の盃して、汝八つ橋女ながらも武士の妹なり、我今汝に引添て三五兵衛かたへ送るべし、もし事成就せずんば生て再び帰るべからず、母人も嘆き給ふべからずとて、用意の乗物へ

(下段) ふもんごん

無筆の親父息子に手紙を書せ、だん／＼文言をこのむ。

おやぢ 先日御相談仕候間いよく先方へも申遣し候あいだ、大概承知と相みへ候間、此だん御しらせ申候間と、やみくもにあいだといふ文言を好むゆへ、**むすこ** きのどくに「思ひ、へそれではあんまり文言に間がありすぎませう。**おやぢ** ぬからぬ顔でへ急がぬ用事だから、いくら間があつても大事ない。

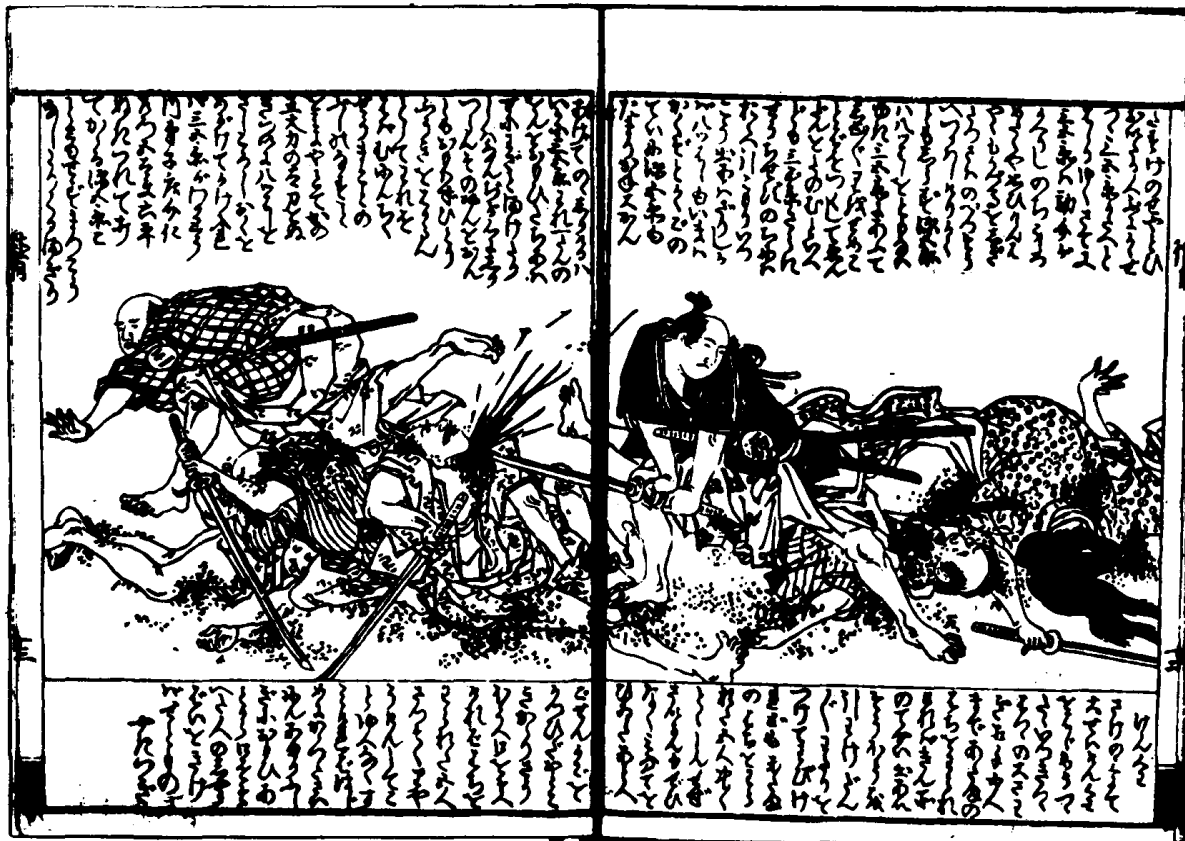
〔十一—十二オ〕



助け乗せ、雇ひおいたる人夫に昇せつ、三五兵衛かたへと走りゆく。さて又三五兵衛は勘介が帰した後、後めたくや思ひけん、早くも数馬を鳴立沢の別荘へ遣しけり。かくともしらず源五兵衛は八ツ橋を伴いゆき、三五兵衛に会て種々理をせめ言葉を尽して縁談を頼むといへども、三五兵衛更に承知せず、後には奥へ引こもり一向出合ざりしかば、八ツ橋も今はかくぞと覚悟の体に、源五兵衛もたまりかね、大音「あげて罵りけるは、いかに三五兵衛、われ一旦の恩を思ひ、太刀合にわざと負たりしは、汝が心に知つらん。その恩を恩とも思はず独り富貴をはからんとして我を隔む人畜生、まことの武士のなすことをみよやとてかの五大力の太刀を抜き、遂に八ツ橋を刺殺し、奥をめがけて駆入れば、三五兵衛が若党門弟子庄介仁左衛門五太夫六平抜きつれて打てかゝる。源五兵衛こと、もせず、真向梨割車ぎり、

(下段) けんくわ

酒の場にて大勢喧嘩を始め、打、叩いつ切、張、の大騒ぎ、相手五人まで頭の鉢を割れければ、近所の手合出あ



い、双方を引わけ、だん／＼わたりをつけて詫びけれど
 も、頭の鉢を割れた五人中／＼得心せず。裁人もぜひな
 く皆手を引たあとへ」五錢籠を担ひだ男来か、り、双方
 へ口を添へければ、鉢を割れた五人早速料見して事故な
 く済みければ、初にか、つた裁人、あまりふしぎに思ひ、
 後から口を添へた人の商売をきけば、瀬戸物の焼継ぎ。

〔十三ウー十四オ〕

水もたまらず四人まで同じ枕にふしたりけり。今の世までも言
 伝ふ五人斬とはこれなんめり。源五兵衛は血刀拭ひ、三五兵衛
 を打取んは易けれども、我母日外大病のとき力を添し恩あれば、
 命は暫く預るぞと、しづ／＼我家へ立帰る。三五兵衛は源五兵
 衛が帰るを遅しと転び出、八つ橋が死骸かき抱き、いかに八つ
 橋どの、さぞや某を憎しとも思ひ給はんが、魂未だこゝにあら
 ば一通きいてたべ、御身と数馬が中はとくより知たるゆへ、ゆ
 く／＼妻せんと、或日占かたをおきてみるに、ふたりが「仲甚
 だ悪く、もしこれを夫婦となさば男女共に剣難にて死すべし、

〔十三ウー十四オ〕



もし早くその中を引割ば一人は助かるべしと、三度違ぬ八卦の表、子を思ふ親心、わざと源五兵衛と仲悪くなりしも二人が中を割んがため、それともしらず源五兵衛押て嫁入の今日に至り、たとへ此わけを語るとも中／＼占方八卦をまこと、する源五兵衛が氣質にあらず。それ故そなたを見殺せしも、八卦の表に合たる不運、この所を聞分て成仏あれ、八つ橋殿と、初て明す三五兵衛が心の中ぞ道理なる。

(下段) ぬす人

亭主のるすに泥棒入りしを女房みつけ、声をたてんとするところを盗人そばなる火入を投付しが、その火入女房の胸へ当り、はつと言て目を回したところへ、亭主立かへり、盗人をとつて押へ、**てい主** おのれよく盗る物にとを「欠て人の女房の命をとろうとしたな、これ人の命が質にもおかれるものか、ときめつくれば、**ぬす人** それだから、まだぶちころしきりはしませぬ。

(十四ウー十五オ)

数馬は父の怒に力なく八つ橋に離別の文を送り、鳴立沢に閑居せしが、八つ橋が横死を聞及び、明暮嘆き恋慕い、すでに病に臥しけるが、夢現ともなく八つ橋が亡魂来り、ありしことども語いける。これよりして数馬が病いよく重く、一命旦夕に逼りしかど、三五兵衛大きに驚き種々の仏事追善を設け、八つ橋が跡懇ろに弔いければ、数馬も少し心よくぞなりにける。源五兵へ方にてはほのかに三五兵へが心底を聞伝へ、さては八つ橋が一命は定まりし定業」なりけるかとして、忽ちに恨はれて昔のごとく睦み語ひける。その後三五兵衛藤沢上人を迎へ、八つ橋が未来成劫をもとめければ、上人四句の偈をしるしていはく、

(この) 是 五大力 除^レ一^ヲ添^レ土^ヲ 為^レ五人切^ト 更^レ点ス^レ八^ノ四^ノ

口^一ヲ 終^ル 吾^レ哭^ク 加^フ 因果始^ル 休^ム 加^ルニ^一口^一ヲ日^一

忽^チ 来^ル 吾^レ賀^ス

此こ、ろは五大力の三字の一を除き土扇を加ふれば五人切の文字となり、口といふ字四つ添れば吾哭加るとなる。これみな因果の道理也。さればその殃今去りて、二つの口の字を添るの日、吾賀の来るとなり。賀の字はよろこびとよむなり。

(下段) はんごんこう

かねて深く言交せし女ふと思いてむなしくなりければ、男はあるにもあられず、恋焦れ、せめていま一ど顔がみたく、唐土の反魂香、近くは浅間が嶽の上りを思ひ出し、日ごろ取交したる文を集め火鉢の中へ打込めば、ばつときなくさい烟はたてど何にもでず。もふ出さうなものとは火鉢の中をのぞひてみれば、火の中でふすくいぶつてゐるものがあるは、まさしく幽霊が出か、つていゝるに違ひなしと、火箸をもつて火鉢の底をかきまはしてみた所が、宵にくべたさつま芋。

〔十四ウー十五オ〕



源五兵衛が義心深きこと誰いふとなく世上に取沙汰ありしかば、近国の大名われ抱へんと使者を以て招ぎたまへども、源五兵へ敢て其命に従はず。一生浪人をたて通しければ弥その心ざしを感じ、諸家の師範を頼み、いろくの引出物を賜りて、今は何不足なき身分となり、親子めでたく栄へけり。そもく此五大力の名剣は盗難を逃る、奇特あり、義興船中にて打死ありしゆへ、乗船の人は別して五大力を祀るなり。そのち此剣を五大力菩薩と崇めまつりけるとなん、めでたしく。○これより此巻の始の半丁からだんく下を読むべし。 曲亭馬琴作

(下段) かけもの

むひつ 正月掛けようと思つて掛物を買ってきた。友だち

どれ、なんだ、ひとつばもよめねへ、こりやアなんといふ

字だ。むひつ なんといふじだか俺もよめねへ。友だち

とてもものことに、よめるのをかつてくればい。むひつ

ばかをいふぜ、よめるとじきに直がしれて悪りひ。



曲亭馬琴作

